

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	陶淵明「擬古」九首原詩考
Author(s)	鈴木 , 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 77 : 1 - 14
Issue Date	2024-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055310
Right	
Relation	



陶淵明「擬古」九首原詩考

鈴木敏雄

一 はじめに

『文選』の部立て（目録中の分類）の中には「雜詩」に次いで「雜擬」の部が立てられ、当時、擬作詩が一つの詩形体としては他と区別されるものであったことが明らかにされている。

その「雜擬」の中に、陶淵明「擬古」九首の其七も、一篇ではあるが、採られている。

今そのことに關し、後世の清の汪師韓（一七〇七—一七八〇）はその論考「雜擬雜詩之別」（『詩學纂聞』所収）の中で歴代の擬作詩を概観し、擬作詩史を綴りながら、多くの雜詩と擬作詩とはそれぞれ異なつた詩形体であり、読む際にその違いに注意しなければならず、陶淵明「擬古」詩も例外ではない旨を、概括的にはあるが、さらに具体化して述べている。

『選』詩以「雜詩」・「雜擬」分爲二類。雜詩者、「十
九首」・蘇・李詩及諸家雜詩是也。雜擬者、凡「擬古」・
「傲古」諸詩是也。擬古類取往古名篇、規模其意調。
其止一二首者、既直題曰擬某篇、而其擬作多者、則雖

概題曰「擬古」、仍於每篇之前、一一標題所擬者爲何篇。此所以別於「詠懷」・「詠史」・「七哀」・「百一」・「感遇」・「遊仙」・「招隱」雜詩也。『文選』所載陸士衡「擬古詩」十二首、謝康樂「擬魏太子鄴中集詩」八首、劉休元「擬古詩」二首、江文通「雜體詩」三十首、無不顯然示人、是以謂之「擬」、此意後人不識也。……古人名作、惟鮑明遠「擬古」八首、陶靖節「擬古」九首、未嘗明言所擬何詩。然題曰「擬古」、必非若後人漫然爲之者矣。……

『選』詩は「雜詩」・「雜擬」を以て分けて二類と爲す。雜詩は、「十九首」・蘇・李の詩及び諸家の雜詩是れなり。雜擬は、凡そ「擬古」・「傲古」の諸詩是れなり。擬古の類は往古の名篇を取り、其の意調に規模す。其の止だ一二首のみなる者は、既に直ちに題して某篇に擬すと曰ふも、而も其の擬作多き者は、則ち概ね題して「擬古」と曰ふと雖も、仍ほ每篇の前に於いては、一一題を標さば擬する所の者は何篇と爲さん。此れ「詠懷」・「詠史」・「七哀」・「百一」・「感遇」・「遊仙」・「招隱」の雜詩に別かるる所以なり。『文選』に

載する所の陸士衡「擬古詩」十二首、謝康樂「擬魏太子鄴中集詩」八首、劉休元「擬古詩」二首、江文通「雜體詩」三十首は、顕然として人に示さざる無く、是を以て之れを「擬」と謂ふも、此の意後人識らざるなり。

……古人の名作は、惟だ鮑明遠の「擬古」八首、陶靖節の「擬古」九首のみ、未だ嘗て擬する所は何詩と明言せず。然れども題して「擬古」と曰へば、必ず後人の漫然として之れを為す者の若きに非ざるなり。……)

汪師韓はここで、陶淵明「擬古」九首も、一首々々は某篇に擬するとは言つてはいないものの、決して漫然とは作られておらず、「擬古」と題している以上、陸機「擬古」十二首等と同様に、一首々々何篇に擬すると題を標せるように作られているはず、と指摘している。

拙稿では、この汪師韓の指摘を承け、陶淵明「擬古」九首の一首々々について、某篇に擬するというように、原詩の特定を試みたい。

但し、陶淵明「擬古」九首も陸機「擬古十二首」と同じように作られているとは言え、陶淵明は陸機の擬作とは一変させ、陸機のように二句一聯ごと原詩の句の類義語や類義概念でそのまま言い換えて行くような一目瞭然の手法で作つてはいない。陶淵明は原詩の痕跡を残しつつも、自らの言葉で大きく言い換えつつ原詩をなぞつて行くような技巧を不断に凝らしているので、その分、原詩が無いかに思えたり、陸機らの擬古詩と較べて破格に見えたりもする。或いは、唱和詩風に見えるところで

作詩を構造的に解明できる一方法であると思われ、結論から言えば、そこからは、陶淵明が「古詩十九首」の捕捉する古典的な対象と如何に向き合ったか、その呼応関係が見えて来よう。以下、各首具体的に見て行きたい。

二 擬「迴車駕言邁」詩としての「擬古」其二

はじめに、其一からではなく、順序を変え、其二を先に見たい。それは、陶淵明「擬古」九首中で其二のみ、既に原詩の指摘があることに因る。それがまた、他の原詩特定の方向をも示唆してくれる。

陶淵明「擬古」其二が擬「迴車駕言邁」詩であることは、清の王船山(一六一九-一六九二)が「陶令も亦た此に效ふ」と言い、指摘している^[1]。

すなわち陶淵明「擬古」其二、

辭家夙嚴駕 家を辞して夙に駕を厳しめ
當往至無終 当に往きて無終に至るべし
問君今何行 君今何くに行くやと問へば
非商復非戎 商に非ず復た戎にも非ずと
聞有田子泰 聞けば田子泰なる有り
節義爲士雄 節義は士の雄と為すと
斯人久已死 斯の人久しく已に死するも
郷里習其風 郷里は其の風に習ふ
生有高世名 生きては高き世名有り
既没傳無窮 既に没しては無窮に伝ふ
不學狂馳子 学ばず狂馳の子の

も好いかも知れない^[2]。陸機らの擬古詩を仮りに形似というのなら、陶淵明の「擬古」九首は神似の極みとも言えるような様相を呈している。原詩の特定は、逆にそれらの点に着眼留意する必要がある。

また、原詩を特定する際に、陶淵明が「擬」、すなわち原詩をなぞると言っているから、原詩との差異ではなく、言うまでもなく極力原詩との類似点を見出だすことに力点を置く必要がある。差異を見ても、「擬」は見えて来ないものと思われる。

従来から話頭に乗っているように、陶淵明「擬古」九首の原詩は「古詩十九首」の中に在る。周知のごとく、擬作するに際し、陶淵明は「擬古」九首全篇に亘つて「古詩十九首」と共通する「行行」「迢迢」「皎皎」「金石」「萬里」「慷慨」「松柏」「被服」「辛苦(苦辛)」「寒衣」「世嗤」などの語を意図的に使用し、原詩が「十九首」中に在ることを示唆する符牒を予め散りばめてかれている。

なお、それを特定する際の模倣対象については、以下に詳述する、例えば陶淵明の「擬古」其一は「古詩十九首」其七に真似ているというように、単純に一篇対一篇の対面双方の関係でのみ見るという捉え方はしない。陶淵明「擬古」其一の模倣対象は「古詩十九首」其七というのではなく、其七を媒体とし、其七が捉えている更に内なる核心となる対象を陶淵明「擬古」其一も捉えているというように、原詩「古詩十九首」中には更に中核となる模倣対象が有り、それを捉えるものとする^[3]。擬

直在百年中 直だに百年の中に在るのみなるに

は、「古詩十九首」其十一、

迴車駕言邁 車を迴らせて駕して言に邁き
悠悠涉長道 悠々として長道を渉る
四顧何茫茫 四顧するも何ぞ茫茫たる
東風搖百草 東風百草を揺るがす
所遇無故物 遇ふ所は故物無し
焉得不速老 焉んぞ速かに老いざるを得んや
盛衰各有時 盛衰は各おの時有り
立身苦不早 身を立つること早からざるに苦しむ
人生非金石 人生は金石に非ず
豈能長壽考 豈に能く長く寿考ならんや
奄忽隨物化 奄忽として物に随ひて化すれば
榮名以爲寶 榮名以つて宝と為さん

に擬す(これが模倣媒体となっている)。模倣を陸機「擬古」のような相互対応のものを見ると、一見全く似ていないが、まず形式上の擬古詩の約束事として、原詩と共通する「駕」「風」「百」「人」「生」「名」等の文字に、陶淵明は模倣の痕跡を残す^[4]。更に、擬作初句の「辭家夙嚴駕」も原詩の初句「迴車駕言邁」の類義概念で作っている。それも原詩であることを示唆している。

そこで改めて両篇の共通項を見ると、この擬作の模倣対象は「名」であると分かる。原詩が短い人生の中では「榮名」を大切にすしかないと詠むのをなぞり、擬作では「高世名」が大切だと詠んでいる。

ただ原詩では、人生という旅の中で往くあても無く立身に焦慮するだけの自らの思いとして「名」を残すことの大切さを詠んでいる所を、擬作ではそれを逆転させ、旅をして唯一「名」が既に残り大切にされている田子泰（魏の田疇）を登場させ、その郷（無終）に至り得たとして、田子泰のような人生であってこそ始めて「名」は伝わりと詠む。未到を到達で言い換え、いわば反対模倣になっているので、原詩と同じことを言っている（呼応している）、全く異なる詩に見え、「古詩十九首」其十一が原詩であることに気づきにくい。当時の擬古詩の常套である形似ではない詠み方を、陸機とは異なる擬作を目指す陶淵明は、既にここでしている。そして、そのような擬作が陶淵明によってなされていることを、王船山は承知していたことになる。

三 擬「明月皎夜光」詩としての「擬古」其一

さて、順序を其一に戻し、以下順次、其九まで見て行きたい。陶淵明「擬古」其一、

榮榮窗下蘭 采々たり窓下の蘭
密密堂前柳 密々たり堂前の柳
初與君別時 初め君と別れし時
不謂行當久 行きて當に久しかるべしとは謂はず
出門萬里客 門を出でて万里の客たれば
中道逢嘉友 中道にして嘉友に逢ふならん
未言心相醉 未だ言らざるに心相酔ひ

不在接杯酒 杯酒に接するに在らず
蘭枯柳亦衰 蘭は枯れ柳も亦た衰へ
遂令此言負 遂に此の言をして負かしむ
多謝諸少年 多く謝げん諸少年よ
相知不忠厚 相知るは忠厚ならずと
意氣傾人命 意氣人命を傾くれば
離隔復何有 離隔するも復た何をか有らんや
は、擬作であることの約束事として、共通する「時」「門」「友」「負」「復何」等の文字に模倣の痕跡を残しているので、「古詩十九首」其七、

明月皎夜光 明月夜光を皎くし
促織鳴東壁 促織東壁に鳴く
玉衡指孟冬 玉衡は孟冬を指し
衆星何歷歷 衆星何ぞ歷々たる
白露霑野草 白露は野草を霑ほし
時節忽復易 時節忽ち復た易はる
秋蟬鳴樹間 秋蟬は樹間に鳴き
玄鳥逝安適 玄鳥逝きて安くにか適く
昔我同門友 昔我が同門の友
高舉振六翮 高舉して六翮を振るふ
不念攜手好 手を携へし好しみを念はず
棄我如遺跡 我を棄つること遺りし跡のごとし
南箕北有斗 南には箕北には斗有り
牽牛不負軛 牽牛は軛を負はず
良無盤石固 良に盤石の固き無ければ

虚名復何益 虚名復た何の益かあらんや

に擬していると言える（これが模倣媒体となっている）。模倣対象は、「友」であろう。陶淵明の擬作の手法は、陸機「擬古」とは異なり、原詩の全体ではなく、中核に擬するに在る。擬作、原詩ともに、季節の推移とともに、これまで同門の友であった友人が、自分に負き、自分を棄てて出て行ってしまふ事を詠む点が核心となっている。ただし、「友」字の使い方（残し方）は原詩のままにせず、原詩の「同門の友」を擬作では「客」と言い換え、旅先での新たな「友」として「嘉友」を登場させた上で、原詩の「昔我同門友、高舉振六翮」を、擬作は「出門萬里客、中道逢嘉友」と言い換えてなぞり⁵⁵、原詩・擬作それぞれ交遊というものは「盤石の固き無し」「忠厚ならず」と言って共通する意で結んでいる。擬作も、使用語彙こそ異なれ、原詩との類義概念で構成されていて、言わんとする所は、原詩と同じであると分かる。

四 擬「庭中有奇樹」詩としての「擬古」其三

陶淵明「擬古」九首中では、原詩と擬作の呼応関係が極めて見出しにくいもの一つとなっている其三、

仲春遘時雨 仲春時雨に遘ひ
始雷發東隅 始雷東隅に発す
衆蟄各潛駭 衆蟄各おの潛み駭き
草木從此舒 草木此れより舒ぶ（此一作横）
翩翩新來燕 翻々たり新來の燕

雙雙入我廬 双々として我が廬に入る
先巢故尚在 先巢故より尚ほ在れば
相將還舊居 相將めて旧居に還れり
自從分別來 分れ別れてより來のかた
門庭日荒蕪 門庭日に荒蕪す
我心固匪石 我が心は固より石に匪ず
君情定何如 君が情定めし何如
は、「古詩十九首」其九、

庭中有奇樹 庭中に奇樹有り
綠葉發華滋 綠葉華の滋きを発く
攀條折其榮 条を攀ちて其の榮を折り
將以遺所思 將に以て思ふ所に遺らんとす
馨香盈懷袖 馨香懷袖に盈つるも
路遠莫致之 路遠ければ之を致す莫し
此物何足貴 此の物何ぞ貴ぐに足らんや
但感別經時 但だ別れて時を経るに感ずるのみ
に擬す（これが模倣媒体となる。以下、同じ）。両篇に共通する「發」「將」「別」「庭」「時」「此」等の文字が模倣の痕跡を残す。

模倣対象は、取り返しのつかない「別れ」であろう。原詩・擬作ともに、春が返って来て庭の樹木も再び花^{ひら}発き、別れた人が再び帰って来る思いをその思う人と伝え合いたいのだが、別れて以来、両者の間の隔たりはもはや心変わりと言って好い程のものとなっしまっている、と詠む。陶淵明の擬作は春の再来を告げるための燕の詠

が入っていて原詩との呼応関係が見えにくくなっているが、擬作の「門庭荒蕪す」は原詩の「馨香致す莫し」と同じ意である等、両篇の共通点に着目すれば、両者相似ることが見えて来る。

五 擬「驅車上東門」詩としての「擬古」其四

陶淵明「擬古」其四、

迢迢百尺樓 迢々たり百尺の樓
分明望四荒 分明に四荒を望む
暮作歸雲宅 暮れには帰雲の宅と作り
朝爲飛鳥堂 朝には飛鳥の堂と為る
山河滿目中 山河目中に満つるも
平原獨茫茫 平原独り茫茫たり
古時功名士 古時の功名の士は
慷慨爭此場 慷慨して此の場を争ふ
一旦百歳後 一旦百歳の後
相與還北邙 相与に北邙に還る
松柏爲人伐 松柏は人の伐るところと為り
高墳互低昂 高墳互に低昂す
頽基無遺主 頽基に遺主無く
遊魂在何方 遊魂何れの方にか在る
榮華誠足貴 榮華は誠に貴ぶに足るも
亦復可憐傷 亦た復た憐れみ傷むべし

は、「古詩十九首」其十三、

驅車上東門 車を駆る上東の門

慷慨爭此場。一旦百歳後、相與還北邙」となぞっている点に、中核となる模倣対象は在ろう。擬作の「功名の士」は原詩の「陳死の人」であり、両者ともに、どんなに名を馳せた者であっても、必ず墳墓の下で永遠の眠りに就き、永遠に目覚めないと詠む。

六 擬「西北有高樓」詩としての「擬古」其五

陶淵明「擬古」其五、

東方有一士 東方に一士有り
被服常不完 被服常に完からず
三旬九遇食 三旬に九たび食に遇ひ
十年著一冠 十年一冠を着く
辛苦無此比 辛苦は此の比ひ無きも（苦一作勤）
常有好容顏 常に好き容顏有り
我欲觀其人 我れ其の人を觀んと欲し
晨去越河關 晨に去きて河関を越ゆ
青松夾路生 青松路を夾んで生え
白雲宿簷端 白雲簷端に宿る
知我故來意 我が故さらに來れる意を知り
取琴爲我彈 琴を取りて我が為に弾く
上絃驚別鶴 上絃は別鶴を驚かし
下絃操孤鸞 下絃は孤鸞を操る
願留就君住 願はくは留まりて君に就いて住まひ
從今至歲寒 今より歲寒に至らんことを

は、「古詩十九首」其五、

遙望郭北墓 遙かに望む郭北の墓
白楊何蕭蕭 白楊は何ぞ蕭々たる
松柏夾廣路 松柏は広路を夾む
下有陳死人 下に陳しく死せる人有り
杳杳即長暮 杳々として長暮に即く
潛寐黃泉下 潜かに寐ぬ黄泉の下
千載永不寤 千載永く寤めず
浩浩陰陽移 浩浩として陰陽移り
年命如朝露 年命は朝露のごとし
人生忽如寄 人生は忽として寄するがごとく
壽無金石固 壽には金石の固き無し
萬歳更相送 万歳更ごも相送り
聖賢莫能度 聖賢も能く度る莫し
服食求神仙 服食して神仙を求むるも
多爲藥所誤 多くは藥の誤る所と為る
不如飲美酒 如かず美酒を飲み
被服執與素 紉と素とを被服するに

に擬す。原詩と擬作とで共通する「松柏」「望」「暮」「人」「北」「朝」「歳」等の文字に模倣の痕跡が残る。および、「墓」を承ける「墳」という類義語、「千載」「萬歳」を承ける「百歳」という数詞の使い方も、擬作は明らかに原詩をなぞっている。

模倣の対象は、「郭北」「北邙」の「墳・墓」の下に眠る人であろう。原詩の「下有陳死人、杳杳即長暮。潛寐黄泉下、千載永不寤」に呼応させ、擬作は「古時功名士、

西北有高樓 西北に高樓有り
上與浮雲齊 上は浮雲と齊し
交疏結綺窗 交疏は綺窓に結び
阿閣三重階 阿閣は三重の階なり
上有絃歌聲 上に絃歌の声有り
音響一何悲 音響一に何ぞ悲しき
誰能爲此曲 誰か能く此の曲を為すや
無乃杞梁妻 乃ち杞梁の妻なる無からんか
清商隨風發 清商風に随つて発し
中曲正徘徊 曲を中ばにして正に徘徊す
一彈再三歎 一たび弾きては再三歎じ
慷慨有餘哀 慷慨して餘哀有り
不惜歌者苦 歌ふ者の苦しきを惜しまず
但傷知音稀 但だ知音の稀れなるを傷むのみ
願爲雙鳴鶴 願はくは双鳴鶴と為り
奮翅起高飛 翅を奮ひて起ちて高飛せんことを

に擬す。共通する「一」「三」「雲」「絃」「彈」「上」「願」「鶴」「苦」等の文字に模倣の痕跡が残る。特に教詞の「一」「三」は、原詩の特徴をもなぞっている（淵明はそれに「九」「十」をも加えている）。模倣対象は、歌う君の「絃」が弾く、知音の稀れなる曲であろう。

擬作冒頭の「東方有」は原詩冒頭の「西北有」に擬えているが、そこで曲を弾く「西北の高樓の、杞梁の妻」を擬作は「東方の一士」で類似させる。原詩・擬作ともに、その知音と為り一緒に在りたい思いを詠む点で両者

共通している。

七 擬「東城高且長」詩としての「擬古」其六

陶淵明「擬古」其六、

蒼蒼谷中樹	蒼々たり谷中の樹
冬夏常如茲	冬夏常に茲のごとし
年年見霜雪	年々霜雪を見る
誰謂不知時	誰か謂ふ時を知らずと
厭聞世上語	世上の語を聞くを厭ひ
結友到臨淄	友と結んで臨淄に到る
稷下多談士	稷下は談士多ければ
指彼決吾疑	彼を指して吾が疑ひを決せん
裝束既有日	裝束して既に日有り
已與家人辭	已に家人と辞す
行行停出門	行き行かんとして門を出づるを停め
還坐更自思	還り坐して更に自ら思ふ
不畏道里長	道里の長きを畏れず
但畏人我欺	但だ人の我を欺くをのみ畏る
萬一不合意	万一に合はずんば
永爲世笑嗤	永く世の笑嗤ひと為らん
伊懷難具道	伊の懐ひ具さには道ひ難ければ
爲君作此詩	君が為に此の詩を作る

は、「古詩十九首」其十二、

東城高且長	東城は高く且つ長く
逶迤自相屬	逶迤として自ら相属なる

と言つて、両篇ともに会いに行くのを躊躇っている。それが中核の模倣対象となつていよう。なぜ躊躇つたのかは、擬作では「(世の)人の我を欺くを畏る」と明言する。それは、原詩の詠む「君」が世間の欺きによつて知音が居なくなり悲しんでいることをなぞっているからであろう。擬作結句の「君」は、原詩結句の「君」に同じく、世間が我を欺いて(冬夏常着の草木は時を知らないという)疑いを解決できないと畏れる「君(然るべき談士)」を指す。両篇同じことを詠みつつ、擬作が原詩の解釈にもなっている。

因みに原詩の「秋草萋已綠」を陶淵明は「蒼蒼谷中樹、冬夏常如茲」となぞり、草木が夏のみならず冬も蒼々としている」と詠む点も、原詩の解釈であらう¹⁶⁾。

八 擬「生平不滿百」詩としての「擬古」其七

陶淵明「擬古」九首中で唯一『文選』に載録されている其七、

日暮天無雲	日暮れて天に雲無く
春風扇微和	春風微和を扇ぐ
佳人美清夜	佳人清夜を美しとし
達曙酣且歌	曙に達するまで酣ひ且つ歌ふ
歌竟長歎息	歌ひ竟つて長く歎息し
持此感人多	此を持して人を感ぜしむること多し
皎皎雲間月	皎々たり雲間の月
灼灼葉中華	灼々たり葉中の華

迴風動地起	迴風は地を動して起こるも
秋草萋已綠	秋草は萋として已に緑なり
四時更變化	四時更(こ)も変化し
歲暮一何速	歲暮一に何ぞ速かなる
晨風懷苦心	晨風は苦心を懷き
蟋蟀傷局促	蟋蟀は局促なるを傷む
蕩滌放情志	蕩滌として情志を放たん
何爲自結束	何為れぞ自ら結束する
燕趙多佳人	燕趙には佳人多く
美者顏如玉	美なる者は顔玉のごとし
被服羅裳衣	羅の裳衣を被服し
當戶理清曲	戸に当たつて清曲を理ふ
音響一何悲	音響一に何ぞ悲しき
絃急知柱促	絃の急なるは柱の促すを知る
馳情整中帶	情を馳せて中帯を整ふるも
沈吟聊躑躅	沈吟して聊か躑躅す
思爲雙飛燕	双飛燕と為り
銜泥巢君屋	泥を銜んで君が屋に巢くふを思へば

に擬す。共通する「時」「長」「束」「多」「懷」「君」等の文字に模倣の痕跡が残る。その他、「燕趙」と「稷下」、また「裝束」と「裳衣」等も類義語で共通させている。原詩の「燕趙多佳人」を擬作では「稷下多談士」でなぞり、それぞれ「佳人」「談士」に会いに行こうとするのではあるが、原詩では「馳情整中帯、沈吟聊躑躅」と言い、擬作ではそれをなぞつて「行行停出門、還坐更自思」

豈無一時好 豈に一時の好きこと無からん
 不久當如何 久しからざるをば^は當た如何せん
 も、原詩との呼応関係が見出しにくく、九首中で原詩が特定しにくい一首となつている。

この「擬古」其七は、「古詩十九首」其十五、

生平不滿百	生平は百に満たざるに
常懷千歲憂	常に千歳の憂ひを懷く
晝短苦夜長	晝は短く夜の長きに苦しむ
何不秉燭遊	何ぞ燭を秉りて遊ばざる
爲樂當及時	樂しみを為すは當に時に及ぶべし
何能待來茲	何ぞ能く來茲を待つや
愚者愛惜費	愚者は費えを愛惜し
但爲後世嗤	但だ後世の嗤ひと為る
仙人王子喬	仙人王子喬は

難可與等期 与には期を等しくすべかり難し
 に擬す。原詩と擬作の呼応関係の約束事として、他の詩と同様に、共通する「夜」「長」「時」等の文字に模倣の痕跡を留めるのであるが、この査証となる文字は他と較べて数が少ない。しかし、類似内容から絞り込み特定を試みるとこの詩に行き着く。好き「時」で言い換えている所の、樂しみを為す「時」が模倣対象となつていよう。原詩との対応関係を見ると、原詩が「晝短苦夜長、何不秉燭遊」と言っているのを承け、擬作では原詩の言う通り「燭を秉つて遊ぶ」ことを試みた」と詠んでいる。すなわち擬作は、「佳人美清夜、達曙酣且歌」と詠んで原詩

と呼応させる。原詩で「楽しみを為すは当に時に及ぶべし」と言っているので、擬作は、春の佳い夜なので朝まで飲酒して歌を唱い、楽しい時を過ごしてみせる。ただしその結果はと言えば、王子喬とは期を等しくはできず、すなわち原詩に言う「時」は「久しからず」であることに変わりはない。と陶淵明は結ぶ（原詩に同じ）。

擬作の手法としては、前掲二に掲げた其二同様、陶淵明は事前を事後で言い換える、いわば反対模倣を行っている（唱和詩風に思える）。さすれば『文選』は、この擬作手法を以て「雜擬」に分類していることになる。

九 擬「青靑陵上柏」詩としての「擬古」其八

陶淵明「擬古」其八、

少時壯且厲	少時壯んにして且つ厲しく
撫劍獨行游	劍を撫して独り行游す
誰言行游近	誰か言ふ行游は近しと
張掖至幽州	張掖より幽州に至れり
飢食首陽薇	飢ゑては食す首陽の薇
渴飲易水流	渴きては飲む易水の流れ
不見相知人	相知の人を見ず
惟見古時邱	惟だ古時の邱を見るのみ
路邊兩高墳	路邊の兩高墳は
伯牙與莊周	伯牙と莊周となり
此士難再得	此の士は再びは得難し
吾行欲何求	吾が行何をか求めんと欲せし

も、前の「擬古」其七等と同じく、いわば反対模倣の手法で擬している。一見、原詩が特定しにくく思えるが、捉え方は其七等と同じで、人生の旅に於いて辺地まで行ったとする擬作と、反対に都まで行ったとする原詩との呼応関係が捉えられれば、「古詩十九首」其三、

青靑陵上柏	青々たり陵上の柏
磊磊澗中石	磊々たり澗中の石
人生天地間	人は生く天地の間
忽如遠行客	忽として遠行の客のごとし
斗酒相娛樂	斗酒もて相娛樂すれば
聊厚不爲薄	聊か厚しとして薄しと為さず
驅車策駑馬	車を駆りて駑馬に策ち
游戲宛與洛	宛と洛とに游戲す
洛中何鬱鬱	洛中何ぞ鬱々たる
冠帶自相索	冠帯自ら相索む
長衢羅夾巷	長衢は夾巷を羅ね
王侯多第宅	王侯は第宅多し
兩宮遙相望	兩宮遙かに相望み
雙闕百餘尺	雙闕は百餘尺なり
極宴娛心意	宴を極めて心意を娛しましむれば
戚戚何所迫	戚々何の迫まる所ぞ

に擬すると分かる。これも模倣の痕跡としては少なく、共通する「行」と「兩」等の文字に残るのみとなっている。人生の「行」(たび)が模倣対象であろう。また「兩」字は、都の「兩宮」を辺地の「兩高墳」で置き換えてい

て、意図的な用いられ方となっている。原詩の都である「宛」「洛」が、擬作では反対模倣として反義の辺地である「張掖」「幽州」で置き換えられているのと一連の擬作手法である。旅先での飲食に関して擬作が「飢・渴」とするのも、原詩の「斗酒・聊厚」を反義でなぞっている。その「行」(たび)で求め得たものは、原詩・擬作兩篇ともに徒勞に終わっている点で共通する。

十 擬「冉冉孤生竹」詩としての「擬古」其九

陶淵明「擬古」其九、

種桑長江邊	桑を種う長江の辺
三年望當採	三年にして当に採るべきを望む
枝條始欲茂	枝條始めて茂らんと欲するに
忽值山河改	忽ち山河の改まるに値ふ
柯葉自摧折	柯葉自ら摧折し
根株浮滄海	根株滄海に浮かぶ
春蠶既無食	春蚕は既に食無く
寒衣欲誰待	寒衣は誰か待たんと欲する
本不植高原	本より高原に植ゑざれば
今日復何悔	今日復た何をか悔いんや

は、「古詩十九首」其八、

冉冉孤生竹	冉冉たり孤り生ふるの竹
結根泰山阿	根を泰山の阿に結ぶ
與君爲新婚	君と新婚を為さば
兔絲附女蘿	兔絲のごと女蘿に付せん

兔絲生有時	兔絲は生ずるに時有り
夫婦會有宜	夫婦も会に宜しき有るべし
千里遠結婚	千里遠く結婚すれば
悠悠隔山陂	悠々として山陂を隔つ
思君令人老	君を思へば人をして老いしむ
軒車來何遲	軒車の來たること何ぞ遅き
傷彼蕙蘭花	傷まん彼の蕙蘭の花の
含英揚光輝	英を含んで光輝を揚ぐるを
過時而不采	時を過ぎて采らずんば
將隨秋草萎	將に秋草に随つて萎えん
君亮執高節	君は亮に高節を執れば
賤妾亦何爲	賤妾亦た何をか為さんや

に擬す。共通する「采」「根」「山」「高」等の文字に模倣の痕跡が残る。

模倣対象は「山河・滄海」「山陂」に隔てられる植物(の「根」との結びつきであろう。原詩の泰山の阿の孤生の「竹」を擬作では長江の辺りの「桑」で置き換え(ただし原詩は、「竹」は男、「蕙蘭花」が女に喩えられる)、「桑」は)三年にして当に採るべきを望むも、原詩に言うように「蕙蘭花」時を過ぎて(竹に)采られず」という情況に陥つたと詠む。原詩と擬作とで、相手を採るかこちらを採つてもらおうかで、立場が相互に逆転しているが、それぞれ「山(山河)」に隔てられて互いにそれが出来なくなつたと詠んでいる点は共通する。そして結二句で、原詩の「君亮に高節(孤生)を執れば、賤妾亦た何をか

為さん」をなぞり、擬作は「本より高原に植ゑざれば、今日復た何をか悔いん」と結ぶ。すなわち、当初から両者は「根」が植わっている所が異なっているため、その結びつきは成立しないのだと結論づけている。その点でも、原詩・擬作は両篇共通する。

なお、擬作に於けるこの陶淵明の解釈を踏まえれば、原詩に言う所は、「兔絲」と「女蘿」の結びつきこそ本来であり、「孤生竹」と「蕙蘭花」の結びつきは、当初からあり得なかつたことも分かつてくる（始めから「高原」に植えなかつた「桑」に同じ）。

十一 おわりに

擬作は、創意を表出する文学であるよりも、「擬古の類は復古の名篇を取り、其の意調に規摸す」と汪師韓も言うように、古典の名篇に遡及する文学であると言つて好いのではないか。陶淵明「擬古」九首も、陶淵明にとつて古典の名篇である「古詩十九首」に遡及し、その模倣対象（「意調」）を自らのものとするにより、自らの詩の意調を深めることを目指している。その深さを知るためには、原詩の特定が欠かせない。

龔斌氏は陶淵明「擬古」九首の「集評」に、清初の陳祚明（一六二三・一六七四）『采菽堂古詩選』卷十三の陶詩評を引き、

「擬古」九章情思回曲、辭旨纏綿、王元美之論「離騷、脩隙者不能摘」故也。即其句調、往往鄰十九首矣。

ないということであるのかも知れない。

陶淵明「擬古」九首は、陳祚明の語を借りれば、「忠臣怨夫」の「情思の回曲し、辭旨の纏綿たる」意調を捉えようとしている詠ということになる。

注

〔1〕『文選』には、顔延之「和謝監靈運」と王僧達「和琅邪王依古」の二首の「和」詩が登載されているが、唱和詩の部立て（目録）は無く、それぞれ贈答と雜擬に分類される。王僧達の唱和詩は、或いは擬作と看做されたかの考察の余地を残す所であるが、今は「依古」として擬作に分類されていると見ておく。

〔2〕フランスの文学者ルネ・ジラル（一九二三・二〇〇五）『欲望の現象学』（叢書ウニベルシタス29）の模倣理論に基づく。すなわち模倣主体、模倣媒体、模倣対象の三角形構造で模倣を捉えるものとする。

〔3〕王船山「古詩評選」の「古詩十九首」其十一評に「此直賦情事、陶令亦效此、乃相去何若」（此れ直ちに情と事を賦す、陶令も亦た此に效ふ、乃ち相去ること何若）と言ひ、陶淵明が「此れに效」つたことを指摘している。そして更に、自らの「擬迴車駕言邁」詩の結二句に「及今百年内、何者終吾操」と詠んで、原詩である陶淵明の「擬古」其二の結二句を想起できるよう作っている。因みに、王船山の「擬迴車駕言邁」詩は「日落登崇岡、顧望青天高。四維何茫茫、浮雲但蕭騷。羣動既非一、吾身若秋毫。自非精誠徹、蠕動徒已勞。

（「擬古」九章情思の回曲し、辭旨の纏綿たるは、王元美の「離騷は、脩隙者は摘む能はず」と論ずるの故なり。即ち其の句調は、往々にして十九首に隣す。）と指摘する。これは王世貞（字は元美、一五二六・一五九〇）『藝苑卮言』卷一の、

「騷」辭所以總雜重複、興寄不一者、大抵忠臣怨夫、側怛深至、不暇致詮、亦故亂其紋、使同聲者自尋、脩隙者難摘耳。

（「騷」の辭の総雜重複し、興寄不一なる所以の者は、大抵忠臣怨夫、側怛深く至り、詮ふるを致す暇あらず、亦た故より其の叙ことばを乱せば、声を同じくする者をして自ら尋ぬるも、隙を修めんとする者をして摘み難からしむるのみ。）

を踏まえている。

陶淵明「擬古」九首には「情思回曲、辭旨纏綿」、或いは「總雜重複、興寄不一」という嫌いが有るが、それは「忠臣怨夫」の『楚辭』離騷の辭に同じく、「側怛深く至り、詮ふるを致す暇あらず」という意調に擬えているからであり、「脩隙者」すなわちその嫌いを解消しようとなれこれ詮索修復しようとする者には、却つて尋章摘句できないよう陶淵明が「古詩十九首」の意調に隣接させ擬作しているからである、と陳祚明は指摘していることが分かる。

陶淵明は「古詩十九首」の「同聲者」としてその「意調」に「規模」しているのであり、「脩隙者」としてでは

精魄無固存、奄忽成焄蒿。及今百年内、何者終吾操」と詠む。

〔4〕擬古詩の最も著名な一つ陸機「擬古詩」十二首の最初の「擬行行重行行」詩等を見ても明らかのように、擬古詩は基本的に、原詩の二句一聯ごとの論理展開に沿って言い換えて行く形体を採る。そこから論理展開が原詩と類似することになり、後世の擬古詩もこの原則は変えていない。また更に、原詩の用いる幾つかの文字を残すことも模倣の約束事となっている。陸機「擬行行重行行」詩で言えば、「思君」「遊子」「萬里」「行」「遠」「日」「離」「天」「雲」「衣」「帶」「去」「安」等の文字に模倣の痕跡が残るのはそれである。これらの約束事は、擬作がどの詩を原詩としているかを特定する判断材料となる。

因みに、拙著「隠元『擬寒山詩』訳注」（白帝社、二〇二三年）に於ける、例えばI-14詩やI-17詩他もこの原則的な約束事に基づき、陶淵明の擬古詩と同じように作られている。

〔5〕「嘉友」は、『焦氏易林』の「飲御嘉友」に基づく語で、ここは、客となった我が同門の友が、旅先で心酔するに至る所の今後の自らの吉凶を左右することとなる新たな友の意と取る。

〔6〕原詩の「秋草萎已綠」は、充分にあきらかでないともされるが、『文選』五臣の呂向注に「秋草既衰、盛草綠」といひ、謝朓「酬王晉安」詩「春草秋更綠、公子未西歸」の李善注にも「春草萎萎、故王孫樂之而不反。今春草秋而更綠、公子尚未西歸」とあって、五臣の張銑注に「春草至秋更加綠」というので、「盛草」すなわち常緑草や常緑樹が、回りが紅

葉し落葉する秋になり、緑が却って目立ち際立つこと（「秋
草已凄然矣」を言うと見たい。陶淵明の擬作（に於ける解
釈）からもそのことは知られる。
〔7〕 怨みに報いる意である「修隙」（「脩郅」は、ここでは、
「分かりにくさ」という怨みを解消しようとする意である
と取っておきたい。